

15 アイダッタの話

昔インドに大金持ちの王様がいました。王様はある日

こんな噂うわさをききました。

「インドの北のジャホルンという村に、アイダッタとい

う名の大変な醜男ぶおとこがいる。昔何かの罪つみを得て足切りの刑けい

を受けたらしく、移動いどうするときは、いつも車輪しゃりんのついた

板かたを使う片輪者わもののだが、彼と一緒にいっしょに住んだ男どもは、

彼を慕したってそのそばから離れないし、彼と一度でも話を

した女達は『他人の妻になるよりは、いつそあの人の妾めかけ

になりたい。』とって父母にねだる始末しゅちようで、それも三

十人は下らない数だ。かれが自分の意見を主張しゅちようするのを

誰も聞いたことがなく、いつも他人どうちように同調けんりよくしているだけ

だ。アイダッタに君主けんりよくのような権力があって人の死を助

けてやるというわけではなく、財産ほどこがあつて人に施ほどこしが

できるといふわけでもない。だいいちその醜さみにくときたら、

世界中がびっくりし、象ゾウでも心臓しんぞうマヒを起おこすほどだと

いう。こんなありさまなのに、集まる老若男女らうにやくだんじよがひきも

切らないという。」

王様はアイダツタがどんな男なのかに興味を持って、
アイダツタが住むための宮殿を造り、アイダツタのため
だけの召使いや料理人を100人用意して、アイダツタ
を連れてくるよう家来に命じました。

王様が、召し寄せられたアイダツタに会ってみると、
はたしてその醜さは世界中をびっくりさせるほどでした。
しかしアイダツタが王様のところで暮らすようになって
一月もすると王様はその人となりにだんだん心ひかれる
ようになり、一年足らずのうちですっかり信用するよう
になりました。ちょうどその頃、前の大臣が汚職で追放
されたので王様はアイダツタに国をまかせようとしまし
たが、アイダツタはぼんやりしたありさまで、やっと口
を開くと、とらえどころのないありさまで、その申し出
じたいを辞退しました。王様は早まってアイダツタに国をまか
せようとしたことを、かえって恥ずかしく思ったほどで
した。それからいくらかもたたぬうちに、アイダツタはだ
あいだれもしらない間に王様のところから、いなくなってしまう
いました。王様はその後、心がふさいで何か大切なもの
を失ったかのように思われ、もう何をしても楽しい気持
ちがしなくなつたということなのです。

問 アイダツタに対する王様の気持ちは、はじめと

あと後とでは、どう変わったでしょうか。

50字から60字の間で書きなさい。

